

tanka
magazine

vol.3

トルコの飴玉



COTENTS

月々短歌	p2
連作	
「春は出来事」 中山俊一	p4
「四疊半」 小暮朱	p8
しりとり短歌	p12
著者情報	p13

月々短歌

咲くだろう住宅展示場の庭借り物だらけの眩しい陽射し

僕たちの右目繋がる春の日に予定調和の旅に出ようよ



春は出来事

中山俊一

そういえばピアノの音が隣家から聞こえてこない春は出来事

食卓に $\sqrt{2}$ ほどの涙あり母は黙ってケーキを食べる

シリアルにおいしい牛乳ぶっかけるふやけるように死なないでくれ

君が目を開けば僕は眠るだろう昼間の事件を僕に教えて

その角に愛の在庫が多過ぎて倒産しそうな会社があるよ

スキップができないお前に楽しみの一つぐらいは教えてやれる

指笛をふたりで習得した夜はどんな音にも敏感だった

封切りはしないで桜の花びらを千切って切符を舐める夜です

君がいる素敵なことさ真夜中の黒猫に名を付けてさよなら

ガラス製のシャツ着て出掛ける春の陽よ輝くばかり退屈である

桃色の雑巾それが眩しくて早退したら近付けそうで

刺青を彫るたび君が笑ってた夕焼け夕焼け優しい夕焼け

簡単な呪文を僕にありがとう桜吹雪にふたりは抱かれ

はじめてと行ってくれたねそういえばこんなのおれもはじめてだった

君に会うためだけにある駅だった特急列車は潔く春

四畳半

小暮朱

日の溜まる畳にくべる柔^{やわ}く燃ゆ不始末案件まみれの身体

誰一人傷つかない嘘・気づかない嘘ライナスの毛布を手繰る

夜もすがらそんなそんな鼻をならすのも大事なことだと言って言ってよ

雨漏りは空気に溶け肺に目分量ノ致死量の寂しさトトト

薄氷を踏みしだくような心地する赤児抱くとき嘘をつくとき

頬つけて畳のささくれにいしいろ、とおを越す頃薄墨降った

甘皮を剥いでくように真実を知りたがってたジャンヌダルクか

四畳半の人生だから入れたげないそうやってって思ってたって

行きずりの小学生に与えたい愛持て余しヤクルトを買う

順調に胸が痛んで今回も朝方間際に泣くのでしょうか

肘ついて寝転びへらりと笑うような男のような女がいいよ

ほつれゆくマラソンの列を見よ主治医からの呼び出し電話ベル鳴り響く

一握の君の面影携えて捨てゆく先は修羅か弥生か

立て付けの悪い窓から八重桜吹雪いて魔法今か今かと

勝算は二件隣のミッキーマウスマーチありがとう抱きあげたげる

DATE

4月

TITLE

しりとり短歌

中山

吐け口を愛するへドロと反吐の街救いのような排水口あり

小暮

ありったけ赤紫の光浴びドールが祝福されし路地裏

中山

路地裏に八個並んだ敷石を踏み鳴らしてゆく

せ・き・ど・め・し・ろ・つ・ぶ

小暮

エスオーエス

・・・――・・・ぺっちゃりくちゃくちゃ楽しいね

エスオーエス


また・・・――・・・明日会おうね

中山

会おうね北千住駅のローソンの駐車場の輪留めの隅で

トルコの飴玉 vol. 3

発行日 平成 27 年 4 月 15 日

 Turkish_candy_



短 歌

中山 俊一

 poseidon_29

小暮 朱

 lululu114

写真 / デザイン

吉田幸之助

 ysdkns